

巻頭言

2025年以降を見据えて



徳島大学薬学部長

佐野茂樹

Shigeki Sano

最近「2025年問題」という言葉を耳にする機会が増えてきました。2025年には、約800万人の団塊

の世代が75歳以上となり、全人口の5.6人に1人が後期高齢者という時代が到来することから、国民の医療や介護の大幅な需要増加が見込まれています。そこで、厚生労働省は2025年を目途に、高齢者が住み慣れた地域で自分らしい人生を全うできる社会の実現をめざして、地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の整備を進めています。オックスフォード大学のマイケル・A・オズボーン准教授は、2014年に発表した論文『雇用の未来－コンピュータ化によって仕事は失われるのか』の中で、米国の702の職種の約半数が10～20年後には人工知能（AI）やロボットに取って代わられると予測しま

した。ちなみに、2025年以降も生き残る可能性の高い順に職種を並べると、1位に Recreational Therapists、54位に Pharmacists（薬剤師）、562位に Pharmacy Technicians（調剤技師）、最下位に Telemarketers がランクされています。このような状況のもと、薬学部での人材養成のあり方が厳しく問われる中で、徳島大学薬学部では両学科一括での募集を学科別募集へと変更し、薬学系人材養成への新たな挑戦が始まっています。2025年以降をしっかりと見据え、既存の枠組みにとらわれない柔軟な発想をもって、みなさんと共に時代の変化に応じた確かな方向性を見出したいと願っています。

4年制課程新カリキュラムについて



薬学部教務委員会委員長
生薬学分野 教授

柏田良樹

Yoshiki Kashiwada

徳島大学薬学部では6年制の薬学科においては先導的薬剤師の養成、4年制の創製薬科学科では創薬・

薬学研究者の養成を目指した教育を行っています。平成30年度入試からはそれぞれの学科ごとに学生を募集することになりました（詳しくは薬学部だより vol.20をご覧ください）。この入学者選抜方式の変更に伴い、それぞれの学科のディプロマポリシーに対応した特色あるカリキュラム策定のため、有機系、物理系、生物系、医療系教員から構成されるワーキンググループが設置され、昨年度より議論が行われてきました。平成30年度入学生からのカリキュラムでは、現行の授業科目における重複等を見直し・整理するとともに、60分授業を90分に変更し、創製薬科学科のための新しい教科目、演習等が加えられたものになりました。創製薬科学科学生はこれまでと

同様な薬学科学科生と共通の授業、実習等とともに、新設の授業、演習等を履修します。1年次前期には外国人教員が英語で授業を行う「薬学英語実践講座」や、「研究体験演習Ⅰ」で学習した内容を英語で論文作成を行う「学術論文作成法」、また、学生が各研究室で3～5回程度の実験を行う「薬学体験演習Ⅱ」等が設けられるなど、低学年から研究やグローバル教育にさらに重点がおかれた新しい教科目、演習等が盛り込まれています。本カリキュラムにより創製薬科学科においては、創薬・薬学研究分野でこれまで以上にグローバルに活躍できる人材の輩出につながるものと期待しています。

後輩へのメッセージ

■ 将来に思いを馳せて



大塚製薬株式会社
創薬化学研究所 研究員

山本 純

Jun Yamamoto

徳 島大学薬学部の後輩の皆さんへのメッセージを執筆するにあたり、まずは簡単に私の自己紹介をしたいと思います。私は高校卒業までの18年間を鳥取県鳥取市で過ごし、2005年4月に徳島大学薬学部に入学しました。学部3年生後期から大高章教授が主宰される薬品合成化学分野（現・機能分子合成薬学分野）に所属し、博士前期課程（修士課程）、および後期課程（博士課程）を同研究室で過ごし、2014年4月から大塚製薬株式会社にて創薬研究に従事しております。

さて、在学生の皆さんは講義や部活、バイトなど忙しい日々を過ごしているかと思いますが、ちょっと立ち止まって考えてみてほしいことがあります。それは「(今のところ) 将来どうしたいか?」ということです。皆さんはなぜ薬学部を選びましたか? 私は高校生のときに「薬剤師になりたい」と思ったからです。ん?と思われた方が多いことでしょう。なぜ今は薬剤師ではなく製薬企業で研究をしているのか?・・・恥ずかしながら私は、入学

当初まで「薬学部＝薬剤師になるための学部」だと思っていました。ところが、薬学部出身者は薬剤師として働く以外にも様々な進路があり、「新薬を創ることにより世界中の多くの患者さんを救うことができる」ということを学部1年生のときに知りました。それからは「製薬企業で働きたい」と想い勉強・研究に励みました。修士課程1年生のころ、修士修了後は進学ではなく就職するつもりでいました。ところが、韓国で開催された国際学会に参加した際に、自分の行っていた研究を海外の研究者に評価されたこと、また他大学の博士課程の先輩方と語り合ったことをきっかけに「博士課程に進学する」と決めました。博士課程では「新薬を創りたい」という学部1年生からの想いは変わらず、幸運にも大塚製薬株式会社に就職できて創薬研究に従事しています。このように私の「将来どうしたいか?」はその時々で変わってきましたが、高校生のころから全く変わっていない想いは「医療に貢献したい」というものです。学生のころの「新薬を創ることにより世界中の多くの患者さんを救いたい」という夢は、今は夢ではなく目標です。薬剤師?製薬企業?博士課程進学?海外留学?大学教員?・・・漠然と大学生活を過ごすのではなく、今のところいいので「将来どうしたいか?」を考えてみてほしいと思います。

続いて、製薬企業で働く私が薬学部出身でよかったと思う点について述べたいと思います。皆さんは薬学部の強みを考えたことはありますか?薬学部の講義は、有機化学、生物学、物理化

学から始まり、分析学、製剤学、薬理学、薬物動態学、生薬学など非常に幅広い内容です。それだけ薬剤師には幅広い知識が求められているということでしょう。では、製薬企業ではどうでしょうか?私の専門は有機化学ですが、創薬研究に携わっていると生物学的実験や薬物動態試験の結果も理解しなければいけません。専門外の話を知っていても、確かそんなことも勉強したなと思えることが多いため、薬学部出身でよかったと思います。学部3年生後期になって研究室に配属されると、当然ながら各専門分野を深めようとしします。しかし、薬学部においてそれだけではもったいない!近くには違う分野の研究室に同級生がいるんですから、どんな研究をしてるの?と聞いてみてください。得意不得意がありますから全て理解するのは難しいと思いますが、幅広い知識を吸収する柔軟性を維持してほしいと思います。

薬学部出身者の活躍の場は多種多様です。皆さんは将来どうしたいですか?



創薬体験



創薬生命工学分野 助教

辻 大輔

Daisuke Tsuji

平成29年8月21日及び22日に、独立行政法人日本学術振興会研究成果の社会還元・普及事業「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」（課題名：がん細胞にひと“AWA”吹かせてみませんか？～光でみるオートファジー～ 代表者：石田竜弘教授）より支援を受けて高校生を対象とした創薬体験実習を実施しました。今年度の高校生総参加人数は2日間で合計30名（1年生8名、2年生15名、3年生7名）であり、徳島県を含む四国地方だけで

なく、中国地方や近畿地方からも参加がありました。

本プログラムでは、2016年のノーベル医学生理学賞の受賞対象研究であるオートファジーの仕組みや機能に対する理解を深めるとともに、がん細胞に薬剤が作用するメカニズムやそれによる細胞の変化について興味を持ってもらうことを目的として高校生に実験を行ってもらいました。実際には、乳がん細胞株に対して抗がん剤処理を行い、蛍光タンパクを融合させたオートファゴソームを顕微鏡で観察して、オートファジーの役割などを理解するという、薬学の生物化学分野から薬理学分野にまたがる内容でした。

受講生からは、「とてもわかりやすく楽しかったです」「薬学、創薬について興味が出るような内容でした」など多数のポジティブなコメントをもらうことができました。今後もさらに実施プログラムの改善を行い、若い人たちに創薬研究の面白さについて理解を深めていただけるよう、同様の事業を



がん細胞への薬剤添加実験



蛍光顕微鏡を用いたオートファジー観察

継続して実施していきたいと考えております。

【実施代表者】

石田 竜弘（大学院医歯薬学研究所 教授）

【実施分担者】

奥平桂一郎（大学院医歯薬学研究所 准教授）

異島 優（大学院医歯薬学研究所 准教授）

山本 武範（先端酵素学研究所 講師）

辻 大輔（大学院医歯薬学研究所 助教）

北池 秀次（技術支援部蔵本技術部門 副技術部門長）

薬学・薬剤師体験



臨床薬学実務教育学分野 助教

阿部 真治

Shinji Abe

平成29年8月21日と22日の2日間、高校生を対象とした薬学・薬剤師体験として、独立行政法人日本学術振興会研究成果の社会還元・普及事業である「ひらめき☆ときめきサイエンス」のプログラム「臨床研究事件簿2017～薬学的知識と実験を駆使して臨床現場の謎を解明せよ～」を実施

代表者の阿部真治をはじめ久米哲也教授、佐藤智恵美助教、北池秀次副技術部門長が担当して開催いたしました。プログラム午前中は薬剤師による臨床研究と治療法の開発について講義を行った後に散剤の調合を行い、薬剤を取り扱う際の基本的な手技について理解を深めるとともに薬剤を混合した際の変化について観察を行いました。午後からは薬の配合変化についての講義の後にグループに分かれて注射薬混合の際に生じる配合変化について実験を行い、その結果を基に配合変化が起きない薬剤の組み合わせについて討議しました。2日間で県内外からのべ36人の高校生が参加し、プログラム終了後には皆さんから「自分で考えて実験できたので大変楽しかったです」、「将来、今日したような実験をしたいと思いました」、「難しかったが達成感を味わうことができました」などの感想を

いただきました。今後も薬学部の特徴を活かした高校生対象のプログラムを展開し、薬剤師による臨床研究について理解を深めていただくと同時に将来の優秀な薬学研究者や薬剤師の育成につなげていきたいと考えています。

【実施代表者】

阿部 真治（大学院医歯薬学研究所 助教）

【実施分担者】

久米 哲也（大学院医歯薬学研究所 教授）

佐藤智恵美（大学院医歯薬学研究所 助教）

北池 秀次（技術支援部蔵本技術部門 副技術部門長）



注射薬の配合変化についての実験

研究紹介

■ 膜作用性分子－脂質2分子膜相互作用の可視化



総合薬学研究推進学分野 准教授

植野 哲

Satoru Ueno

膜 作用性カチオン性ペプチドには、細胞膜の破壊、代謝への干渉により殺菌性を示す抗微生物ペプチドや、細胞内への遺伝子や、アンチセンス DNA、高分子医薬品の導入などに使われる膜透過性ペプチド (Cellpermeated peptide : CPP) がよく知られている。膜透過性ペプチドや遺伝子導入に使われるポリエチレンジアミンに代表されるカチオン性ポリマーは、主としてエンドサイトーシス経路を利用して細胞膜を透過することが知られている。しかし、CPP についてエンドサイトーシスに対する阻害剤の共存下での研究などよりエネルギー非依存的なエンドサイトーシスによらない透過経路の存在が報告されている。このエネルギー非依存的な膜透過機構は、細胞やリボソームの様な人工脂質膜を用いた研究においても十分には解明できていない。また、この膜透過のメカニズムは、カチオン性の抗菌ペプチドの細胞膜障害メカニズムと密接に関連していると考えられており、耐性菌の出現しない新たな抗菌剤の開発と密接に関連している。

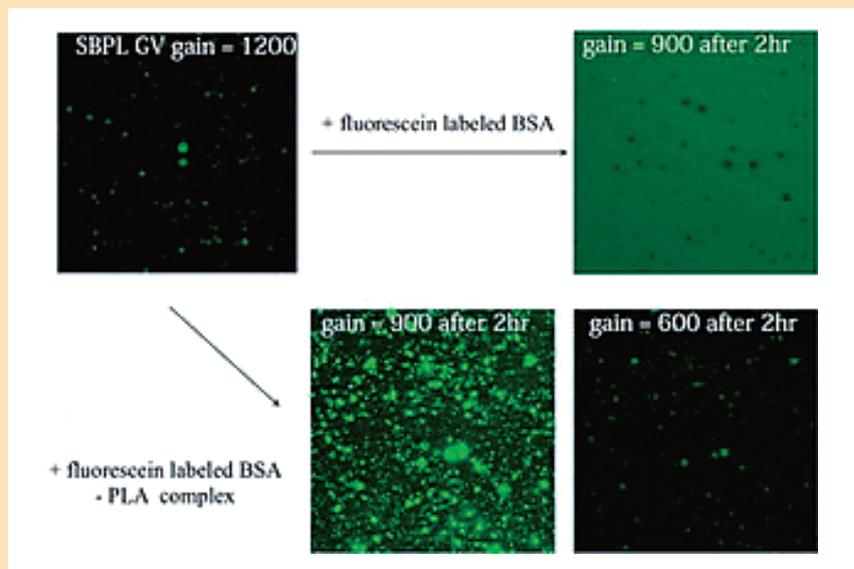


図1 蛍光標識した BSA 単独ではリボソーム内に侵入できないがカチオン性ポリアミノ酸 (PLR) が共存するとリボソーム内に侵入する。

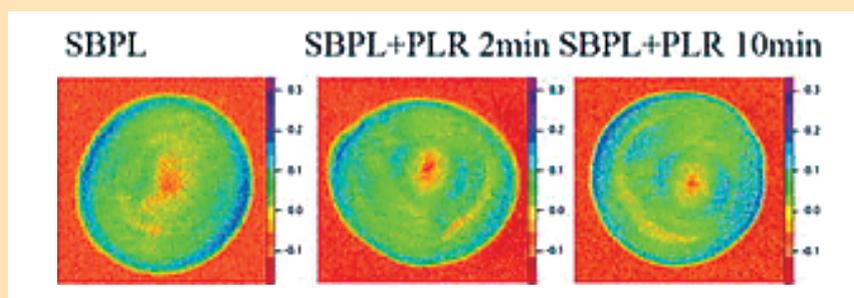


図2 環境感受性蛍光色素を添加したリボソームを用いたカチオン性ポリアミノ酸によって誘起された膜流動性の時間的な変化。

我々は、通常細胞膜の透過が非常に困難であると思われるカチオン性ポリ並びにコポリアミノ酸が負に帯電したリボソーム膜を通過することを見出し、さらにカチオン性ポリアミノ酸のコンフォメーションにより膜透過能が変化することを明らかとした。また、これらのカチオン性ポリアミノ酸共存下において血清アルブミンの様な膜透過能を示さないタンパク質や、ヒドロキシアパタイトナノ粒子がリボソーム膜を透過することも明らかとしている。これらの結果を元にこの透過現象のメカニズム解明を目指し、ポリアミ

ノ酸と相互作用したリボソーム膜の状態変化を周辺環境に依存した蛍光を発生する蛍光色素を使用し、ペプチドの脂質二分子膜内での分布並びにリボソーム膜の膜状態変化を可視化することで動的な膜透過過程における分子間の相互作用解析を行なっている。



■ 薬学教育 カナリアにこめた想い



薬学部機能分子合成薬学分野 教授

大高 章

Akira Otaka

薬学教育が6年制に移行して12年が過ぎようとしている。6年制移行前、東京大学名誉教授 首藤紘一先生が日本薬学会医薬化学部会誌である MEDCHEM NEWS の誌上に西条八十が作詞した“カナリア”とそれをもとにした薬学教育への警鐘を鳴らす一文を寄稿されている。まず、それを紹介したい。

唄を忘れた 金糸雀は
後ろの山に 捨てましょか
いえいえそれは なりませぬ

化学を忘れた薬学、構造式がわからない薬剤師は唄を忘れたカナリアか。いまの薬学は化学を軽視しすぎている。薬剤師として医師や看護師に差をつける化学という特徴を失い、薬剤師はいらないといわれても反論できないではないか。医薬化学においても、薬学出身の医薬化学研究者は構造式を創造する能力が不足し、肩身が狭くなっている。

世の趨勢の結果といってしまうまでもあるが、薬学の有機化学が医薬を無視し、あまりにも合成手段の研究に偏ったことも原因である。先端精密有機合成といいながら再結晶もできなくなっている。有機化学は構造式というメタランゲージを理解するということであり、それこそが我が国の薬学

の基盤であったのだ。6年修学となった時、有機化学という特徴をもたない薬学者は一層みじめになる。

忘れた唄をおもいだすには、薬学教育においてしっかりとした基礎的な化学と実学的な化学を習得させ、そのおもしろさを教えることである。化学が直接役に立つとか立たないの問題をこえて、化学こそ薬学を特徴づける教養でもあるのだ。ほかに何がある。

唄を忘れた 金糸雀は
象牙の船に 銀の櫂
月夜の海に 浮かべれば
忘れた唄を おもいだす

(MEDCHEM NEWS No. 3, 2002より、
斜体字部分 西条八十 作詞 カナリア)

さて、はや10年以上が経過する薬学6年制教育であるが、首藤先生が危惧されたことは、今も薬学教育研究に携る私たちに突きつけられた課題である。蔵本キャンパスにある医療系分野を見た場合、薬学部の最大の特徴は何であろうか？それは、薬学部の基礎教育は化学（有機化学だけではない）を基盤とすることである。そして、医療系学部の中でとりわけ化学を基盤とする基礎教育を受けたことを薬剤師・薬学部卒業生の強みの根源とすべきである。多職種連携が進み、各医療職の差別化が必要とされる時代、「薬学における教養としての化学」にしっかりと立脚することが大事で、これが真に必要なとされる薬剤師の育成に繋がるものと信じている。

このように書いたが、どのように教育すれば良いのか？医療現場の薬剤師さんから、「基礎で習ったことは、臨床現場で役に立たない」、「構造式を見るとゾツとする」等と言われることがある。しかし、薬物療法が科学を基盤とする以上、「基礎で習得した（はず

の) 個々の科学的基盤は、臨床現場で必ず役立つ」、そして「作用、副作用、代謝など薬のすべての性質はその構造式で説明できる」はずである。しかし、現場薬剤師さんから上記のような声が聞こえるのは、基礎教育と臨床教育の双方向からの連携不足が一因である。この現状を改善し、「薬学における教養としての化学」にしっかりと立脚させるには、今までにない基礎教育と臨床教育の密接な連携が必要である。

このような状況下、新たな薬学教育の方向性を探る動きが胎動してきた。ごく最近、私も含め全国の薬学系教員有志で「臨床医薬品化学研究会」を立ち上げ、新たな薬学教育プログラムを構築しようとしている。薬の顔（構造式）を科学的観点に立脚し精密に分析すると、臨床現場で大変役立つ薬の性質が見えてくる。これを顔相占いにちなんで、「薬の顔相^{がんそうがく}」と命名している。薬を教科書とし、基礎と臨床教育の融合を図ろうとするプログラムである。現在、教科書作成に向け、題材として基礎と実用の両面から興味深い医薬品の選定作業を行っている。そしてこの活動を首藤先生が言われる「忘れた唄をおもいだすには、薬学教育においてしっかりとした基礎的な化学と実学的な化学を習得させ、そのおもしろさを教えることである」に繋げたいと考えている。最後に、新たな薬学教育への想いを、カナリアの替え歌にこめさせて頂いた。

化学を忘れた 薬剤師は
今さら医療現場に いりませぬ
いえいえそれは なりませぬ

化学を忘れた 薬剤師は
構造式を 櫂にして
薬の顔に 作用を想えば
忘れた化学を 思い出す

新任教員紹介



臨床薬学実務教育学分野 教授

久米 哲也

Tetsuya Kume

平成29年5月1日付で臨床薬学実務教育学分野の教授に就任いたしました。

私は、昭和55年に本学薬学部製薬化学科を卒業し、薬剤師として徳島県庁に入庁しました。徳島保健所など各保健所において食品衛生監視員を歴任した後、本庁において大気、水質、土壌などの環境管理、浄化槽の維持管理などの廃棄物対策、太陽光、小水力発電などの自然エネルギーの普及・拡大、医薬品の品質管理、薬物乱用防止などの薬務対策、保健・製薬・環境に関する試験研究など幅広い分野を経験するとともに出身教室である衛生化学分野（担当教員 徳村彰先生）において、平成21年に社会人ドクターとして博士（薬学）の学位を取得しております。このような経過を経て、平成29年3月に徳島県庁を定年退職した後、5月に臨床薬学実務教育学分野の教授に着任いたしました。

現在、2025年問題への対応、地域包括ケアシステムの進展などを踏まえ、これま

での薬局・薬剤師のあり方が大きく変わろうとしている中、薬剤師は、チーム医療への参画、地域の保健・医療における現場において、その実践的能力が幅広く求められています。すなわち、超高齢化が進展する中において、医療、介護、予防、生活支援などの分野で存在感のあるオールラウンドな薬剤師の養成に大きな期待が寄せられていると思います。

このような背景をもとに、私が行政薬剤師として培った様々な経験・教訓などを社会薬学という観点から、例えば地域社会に貢献できた時の充実感、組織の中でたくましく生き抜くための人間学に関する智恵などを学生の皆さんに伝えていきたいと考えています。

微力ではございますが、徳島大学薬学部の発展に少しでもお役に立てればと思っております。皆様のご指導とご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。



臨床薬学実務教育学分野 助教

田中 朋子

Tomoko Tanaka

平成29年9月1日付けで、臨床薬学実務教育学分野助教に着任致しました田中朋子と申します。私は本学大学院薬科学教育部 博士前期課程在学中に、国立病院機構に採用され病院にて勤務しました。学位取得後は県外へ転勤し、その後は調剤薬局、徳島大学病院薬剤部に勤務しました。その間12年に渡り、臨床現場での調剤・注射薬業務、混注、製剤、服薬指導、病棟活動、治験など多岐に渡る薬剤師業務に携わり、微力ながら病気に悩まされている患者様へ寄り添えるよう邁進してきました。

これまでにNST 専門療法士、簡易懸濁法認定薬剤師、介護支援専門員などの資格を取得し多職種連携に参画してきました。近年、様々な領域の専門や認定を目指す薬

剤師は多く、多職種連携に焦点を当てた教育方法の開発に力をいれていきます。

私自身を大きく成長させてくれた母校で、教育・研究活動に従事出来ることを大変嬉しく思います。活発なコミュニケーションのもと学生目線に合わせた教育を通じて患者様に寄り添える薬剤師の育成に努めたいと考えています。今後ともご指導ご便達を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



学生の活躍

2016 China-Japan-Korea Symposium on Analytical Chemistry に参加して



分析科学分野
大学院薬科学教育部博士後期課程3年

大塚 裕太

Yuta Otsuka

徳島大学薬学部海外旅費支援制度の補助を得て、2016年8月24日から27日までの4日間、中国福建省武夷山市に渡航し、2016 China Japan Korea Symposium on Analytical Chemistry に参加いたしました。この学会は中国、日本および韓国を中心に、世界各国から分析化学分野の研究者が参加し、分析機器の開発や新規な分析法の提案といった基礎

的研究から、それらを活用した応用研究まで幅広い発表が行われました。武夷山市の特産品は、切り立った綺麗な山々で採れる紅茶（日本でいうウーロン茶に近い）が有名で、学会中はその紅茶が随時ふるまわれました。

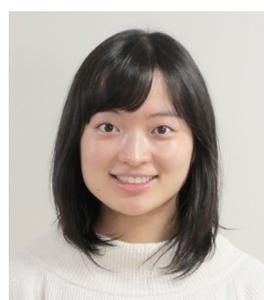
私は、赤外分光分析法の研究を“Investigation on carbamazepine polymorphic transformation kinetics with attenuated total reflectance-infrared spectra and multivariate curve resolution-alternating least squares analysis”と題してポスター発表しました。私にとって海外の国際学会で発表する初めての機会でもありました。発表練習の段階から英語で研究内容を伝えることの難しさを実感し、自分に足りない英語力や表現力などを認識できました。研究室の先生方の熱心なご指導により、本学会ではポスター賞を受

賞することができました。学術論文で見覚えのある著名な先生の講演を聴き、さらに各国の若手研究者と交流することで多くの刺激を受けました。

本学会で、最先端の分析化学技術や独創的な発想を学び、他大学の先生や企業の方と交流することもでき、今後の研究への励みとなりました。これからは医薬品分子の分析化学的研究を通して人々の健康に貢献するために、さらなる研鑽に励みたいと思います。最後に、上記補助金を承りました徳島大学薬学部、丁寧なご指導と貴重な発表の機会を与えてくださいました田中秀治教授に厚く御礼申し上げます。



ポスター賞の授賞式 写真左端が筆者



薬学部薬学科3年
Peer Communication Club

前川 晃子

Akiko Maegawa

Hello! 薬学部Peer Communication Clubです。このサークルは2年前に新しくできました。部員は1年生4名、2年生6名、3年生7名の計17名です。活動内容としては、毎週

水曜日のお昼に、英語で雑談やプレゼンテーションをしています。雑談の内容は日本語のときと変わりません。授業、週末の出来事や趣味、恋愛などについて話します。プレゼンテーションでは主に出身地の紹介をします。

サークルを立ち上げたのは、薬学部学生が中心となって英語を勉強する場を作りたかったからです。蔵本地区には、主に医学科と栄養学科の学生が来ているE-plusと、歯学部棟にあるIFRという部屋がありました。薬学部の学生が英語を話している場がなかったのです。「だったら自分たちで作ろう!」ということで、同級生の川口佳乃さんと一緒にこのサークルを立ち上げました。サークルの顧問を薬物動態制御学分野の石田竜弘教授にお願いしました。

活動には学生だけでなく、薬学部のKaranjit Sangita（カランジット・サンギータ先生）や、薬学部で年に2回英語の授業をしてくださっているTheresa M. Allen（テレサ・M・アレン先生）、Philip Hawke（フィリップ・ホーク先生）にも時々来ていただいています。部員がE-plusやIFRに行くこともあります。

昨年の11月には石田先生の師匠である、Theresa M. Allen先生と藍染め会館に行きました。藍染の歴史や、藍に含まれる成分とその効用などについて、英語で先生に説明しました。

これからも、お互いに(=Peer)英語を教え合い、コミュニケーション(=Communication)を楽しんで、英語の勉強に励んでいきたいです。

サークル紹介

薬学部関連ニュース

教員の異動

平成29年8月31日付退職 分子情報薬理学分野 水口 博之 准教授
平成29年9月1日付採用 臨床薬学実務教育学分野 田中 朋子 助教



学会賞等受賞

【教員の受賞】

■日本薬学会中国四国支部奨励賞

受賞者：猪熊 翼 助教（薬品製造化学分野）／受賞年月日：平成29年8月25日／表彰団体名：日本薬学会中国四国支部
受賞内容：ペプチドへの直接的な不斉反応を基盤とした非天然アミノ酸含有ペプチドの新規効率的合成法開発

■The 26th DDS Conference Postdoctoral Presentation Award 2017

受賞者：福田 達也 助教（衛生薬学分野）／受賞年月日：平成29年9月1日／表彰団体名：静岡 DDS 研究会
受賞内容：リポソーム DDS 製剤と血栓溶解剤併用による新規脳梗塞治療法の開発

■第16回情報科学技術フォーラム FIT 奨励賞

受賞者：北池 秀次 副技術部門長（技術支援部 蔵本技術部門）／受賞年月日：平成29年9月14日／表彰団体名：情報処理学会
受賞内容：アカデミックプラットフォームを目指した研究支援ネットワークシステムの開発と評価

【学生の受賞】（学年は受賞時）

■第77回分析化学討論会 若手ポスター賞

受賞者：柿内 直哉 (M2)
受賞年月日：平成29年5月27日
表彰団体名：日本分析化学会
受賞内容：ハイスループット滴定（43滴定/分）を可能にするフィードバック/固定三角波制御フローレイシヨメトリー

■第131回日本薬理学会近畿部会 学生優秀発表賞

受賞者：湧川 朝治 (D1)
受賞年月日：平成29年6月30日
表彰団体名：日本薬理学会
受賞内容：レンコンに含まれる花粉症発症抑制成分の単離

■第23回中国四国支部分析化学若手セミナー 若手ポスター賞

受賞者：和田 莉緒菜 (B4)
受賞年月日：平成29年7月2日
表彰団体名：日本分析化学会中国四国支部
受賞内容：高濃度試料の分析を目的とした振幅変調フロー分析法の研究

■創薬懇話会2017 優秀ポスター賞

- 受賞者：大橋 栄作 (M2)
受賞内容：Palau'amine の第二世代合成研究
- 受賞者：河野 誉良 (M1)
受賞内容：タンパク質化学合成のための新規 N-ペプチジルアニリド型補助基の開発

- 受賞者：岡本 龍治 (B4)
受賞内容：Nagelamide K, Q の全合成研究
受賞年月日：平成29年7月7日
表彰団体名：日本薬学会医薬化学部会

■創薬懇話会2017 ベストディスカッション賞

受賞者：大橋 栄作 (M2)
岡本 龍治 (B4)
大川内 健人 (B4)

受賞年月日：平成29年7月7日
表彰団体名：日本薬学会医薬化学部会

■第49回若手ペプチド夏の勉強会 最優秀講演賞

受賞者：成瀬 公人 (D1)
受賞年月日：平成29年8月7日
表彰団体名：日本ペプチド学会
受賞内容：固相担体上での N-S アシル基転移反応を基盤としたペプチドチオエステル調製法の開発とペプチド合成への応用

■第49回若手ペプチド夏の勉強会 優秀討論賞

受賞者：上田 将弘 (B4)
受賞年月日：平成29年8月7日
表彰団体名：日本ペプチド学会

■第33回若手化学者のための化学道場 優秀ポスター賞

受賞者：財間 俊宏 (M2)
受賞年月日：平成29年9月2日
表彰団体名：有機合成化学協会中国四国支部
受賞内容：Dippinine B の全合成研究

編集後記

薬学部だより第21号をお届けいたします。この編集後記の欄の掲載は、第12号（June 2013）以来となります。今号の柏田教務委員会委員長の記事にも取り上げられておりますが、編集後

記執筆時点で既に学部として初めての分割入試が開始されており、学部教育面における新たな時代の幕開けを感じさせられております。
(薬学部広報委員会委員 植野 哲)

発行：徳島大学
編集：薬学部広報委員会
広報委員：難波康祐、藤野裕道、植野 哲
佐藤陽一、阿部真治、北池秀次

URL：http://www.tokushima-u.ac.jp/ph/
〒770-8505 徳島市庄町1丁目78-1
徳島大学蔵本事務部薬学部事務課総務係
E-mail：isysoumu3k@tokushima-u.ac.jp

●皆様のご意見、ご要望、エッセイ、写真、絵画、漫画などご投稿を歓迎します。どしどしご応募くださいますようお願いいたします。次回の発行は、平成30年の6月頃を予定しております。